

超重症児とのコミュニケーション場面における保育士の行動  
－ 要求言語の形成に向けたプロセスと介入効果の検討 －

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
障害・行動分析クラスター  
市川 雅子

本研究は、超重症児への遊び実践から、濃厚な医療環境の中にいる超重症児の遊びの意義と、遊びに関わる保育士の役割の可能性を明らかにすることである。予備調査では、3歳の超重症児 a の個別遊びを担当する保育士 A にインタビューと質問紙調査を行った。調査では、a の療養環境にある集団と個別の遊び環境の違いが、a の反応とどのような相互作用を持つのかを調べた。a の反応は、集団よりも個別環境の方が高く、保育士 A の応答は、a の反応に具体的な意味づけを形成しているという特徴があった。実験では、a と個別遊び経験を持たない 2 名の保育士に、a との 1 対 1 の遊び場面を設定した。保育士の応答言語を「肯定」「否定」「要求」の 3 つの意味づけに分類し、非言語の応答行動と共に、介入前後の変化を見た。介入は、a の反応に関する情報の提示と、行動的視点のレクチャーを行った。結果、二人の保育士の応答行動は、言語による意味づけの形成に大きな違いがあった。子どもの反応を、要求として意味づけるためのプロセスには、言語による具体的な意味づけだけでなく、非言語の応答の増加もその後の言語による意味づけにつながる、重要な応答行動であることが示された。そして、このような非言語から言語による応答行動の変化は、相手の反応を確かにしない状況の中でも創られ、子どもの反応に選択的に応答している関わり手の行動として示された。医療環境における遊びは、子どもの反応を要求に代える場として重要であった。